

2011年5月号・季刊31号

ミンダナオの風

執筆編集*松居友 発行：ミンダナオ子ども図書館
連載特集：ミンダナオ子ども図書館流・平和構築の試み



この季刊誌で、ミンダナオ子ども図書館流、平和構築の方法を連載で検討、紹介しよう。

困窮し3食たべられない、

極貧の村の情報を、現地ですべて車で向かう。

そのような村は、たいがい反政府組織の影響下で街道や市町村の中心からかなり離れた山奥だから

4WDか徒歩か馬でしか近寄れない。

村の子どもたちの現状を知るために

まずは奨学生たちが、読み語りを計画し実行

村のほとんどの子どもたちが集まる。

読み語りが終わって病気の子がいなかったら

時には、即断し病院に運ぶ。

次に集まってきた子どもたちの中で、

ことのほか貧しい子どもたちの家庭を訪問

生活や教育の状況を聞き取り調査

困窮しつつも意欲のある

高校生と小学生を奨学生に採用

大学までのスカラシップを約束

学校が遠くて通えない場合や

子どもだけで3食たべられない家庭の子

また、親のいない子や家庭事情の厳しい子の場合

ミンダナオ子ども図書館に住み込みで

食べて、学校に行かせてあげる。

学校教育だけでは、平和構築は無理なので

月一回、高校と大学の子全員がMCLに集まって

文化祭や平和の祈りを自主的に開催

こうして村とのしっかりした絆が結ばれて

人々の心が平和に向かって開かれていく。

Mindano Children's Library Foundation, Inc.
MCL

友達だから、家族だから。
私の大切な人だから。

ぼくが、お茶の水大学で話をしたときに知り合った姉さんと二人の友達に誘われて、ミンダナオ子ども図書館を訪ねた、民希さん。彼女が寄稿して下さった原稿をはじめに掲載しよう。

ぼくは思春期の頃に、両親や弟妹を含めて、自分自身も生死の境に立った経験があるが、一橋大学の3年生と言えば、エリートだが、ちょっと言葉では言えない、精神的な苦しみを体験して来たようだ。後で姉さんに聞いた話だが。

全奨学生たちが集まった総会の後、大勢で昼食をしているときに、前日に読み語りで行ったイスラム地域が、戦闘と洪水で、家々の屋根まで水が届き、舟で救済に向かった話をすると、突然に彼女の目から、大粒の涙が頬を伝わって、止めどなくこぼれ出たのを見て、ハッとしたのを覚えている。

その時から、気になっていたが、4年生になる今年の夏は、ボランティアスタッフとして一ヶ月以上こちらに滞在、卒業と同時に、MCLでスタッフとして、活動を始めるかもしれない。安月給にもかかわらず・・・



松居友さん、スタッフの皆さん、そしてスカラーのみんな・・・お元気ですか？あれからもう2カ月が経ってしまいました。

その間日本では大変な事が起こってしまい、涙がこぼれてしまうような場面も多くなりました。まだ原発事故も被災地の復興も先行きが見えず、不安な中、それでもこの悲しい時だからこそ、一緒にがんばろう、ひとりじゃないからそばにいるからって前よりも少し日本が温かく、人と人が近くなった気がします。この災害により日本からのMCLや海外への支援が減ってしまったのではないかとということが今とても心配です。

MCLで過ごした9日間は本当に本当に、ほんとうに幸せでした。思い出すのが逆にたつらくなってしまうほど、楽しくて幸せでした。

(4人で集まるたびに帰りたいね〜帰りたいね〜って言ってます 笑)

そんな機会を作って下さった友さんに、私を受け入れてくれた子供たちに、私たちを助けてくれたスタッフに、本当に心の底から感謝しています。

MCLには愛と笑顔があふれていました。私はMCLで初めて自分が愛されることを知り、自分が愛しているこ

とを知った気がします。

初めてMCLに着いた夜、疲労でくたくたで弱った心に、夜遅くなのに起きて待っていてくれたみんなのたくさんの笑顔と、ものすごくきれいな歌声が響いて、みんなが私たちを本当に歓迎してくれていることを感じて、思わず着くなり号泣でした。

初め人見知りであまり打ち解けられない私を、すごく心配してくれたこと、日本人とは違う心と体の距離感で初めはすごく戸惑って、プレッシャーでした。

でも日本では心配していても言わなければ訊かないところを、こっちの子はどんどん訊いてくれる。みんなが本当に、ただ純粹に私を心配してくれていることがすごくわかって、ああこの子達に心配してもらわなくてもいいように、私がいつもHappyでいなきゃ！楽しもう！とポジティブに生きれるようになりました。

私が例えばばふら〜つと歯磨きに行っただけでみんなが笑いかけてくれる、声をかけてくれる、気づかってくれる、寄ってきてくれる、助けてくれる、ハグしてくれる。人の温かさが、人ってやっぱり人と一緒に生きるのが本当なんだなあと思いました。

日々の活動を、豊富な写真で、月に2回から3回の割合で更新報告しているMCLのウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！²

MCLはほんとにキセキのようなところだと思えます。何の見返りを求めるわけでもなく無条件で愛してくる・・・。

こんなにもたくさんの“愛”を私にくれた子どもたちに、私はどうやってなにを返せばいいのだろう・・・。

私は友さんの講演も聞いていませんでした。MCLのこともよく知らず、ボランティアを！という高い志を持ってフィリピンに来たわけでも正直ありませんでした。ただ姉に誘われてなんとなく来ただけでした。でもここで私は、生きててよかったなあと思うことができ、そしてそう思わせてくれた子どもたちの村の現実を見ました。

病気の子の多さもありますが、障がいを持たずの多さにもびっくりしました。日本社会がスタンダードで日本の外にも日本と同じような世界が広がっている、というわけではないことを非常によく感じました。ピキットで古着を配るのに参加させていただいたことはものすごく大きな経験でした。

私たちはそれまで言うなれば、いいところしか見せていただけではないところ（見ていかなかったけど・・・）と、貧しいということがどういふことなのかというのを、重く生々しく感じさせられたことでもありました。

そして銃が日常にあるということも。お米を食べれないということがどういふことなのか、私たちに出来ること、彼らにとってもどういふものなのか。舗装されていない道というものがどんな大変なものなのか。なぜ裸んぼの子がいるのか。

ダバオのデパートで目の当たりにした巨大な貧富の格差。日本で売られている安いバナナの理由ともたらず結果。山々、熱帯雨林の美しさとそれがまだら状に草地になっていることの意味。大量生産ではないもののおいしさ、薪で調理したもののおいしさ。ゲーム機がない世界ではいかにたくさん遊びがあるか。電気がない夜の星の信じられないきれいき、でもその困難さ。市場の活気、そこで子どもが働いていること。子どものエネルギーと子どもがもたらす希望、子どもがたくさいることのエネルギ。貧しくて大変だからこそ、人と人がつながって助け合っていること。現場に行つて初めてわかること、行かなければわからないこと、本当に濃密な大きな経験をさせていいただきました。

そして愛するみんなにこの恩に、私はどうやって感謝と愛を示せばいいのだろう、何が出来るんだろう。いまだ本で一所懸命考えています。

日本に帰って、友達に写真を見せると、子供たちの目がすごくきらきらしてると言われました。ミンダナオにいるときはあまりに普通のことである気が付かなかったけど、日本の子と比べるとよくわかりました。友さんもHPで書いておられるように、フィリピンにないものが日本にあるけれど、日本にないものがフィリピンにはある。

よく国際開発援助などの世界では言われることかもしれないですが、むしろ子どもたちからもらうことのほうが多い！そういう言葉を今まではちょっとありきたりだなあと思っていたんですが、本当にそうなんだということの心の底から思います。互いにあるいいものを失わず、相手にあるいいところを得る方法はきっとあると思います。未来は過去から学べるんだから。

自分が子供と接することができるというのも実は私にとって大きな発見でした。

日本では子どもと接する機会などほとんどなく、子どもってかわいしい好きだけ得体のしれない怖いもの、どうしていいかわかんないというのが正直なところで、MCLでも最初あまりに未経験なことで大パニックでした。でも今日日本に帰って、子どもに自然にフツーに接することができる自分が

て、私でも母親になれるかという自信がMCLのおかげでつきました。本当のことを言うとMCLで子育てしたいくらいなんです（笑）。

スタッフも、子どもたちも本当に何から何まで助けてくれて、みんながいだからこそ私はミンダナオで心から楽しめ、幸せな日々を過ごせました。幸せでした。本当にありがとう・・・

MCLを離れる時、なんだか現実感がなくて実はそんなに悲しくなかったんです。でもそれで合つてると思っています。だってMCLにまた帰るかー！！

卒業式の写真見せていただきました。みんなすごくきれいで立派で素敵で、彼らの未来が開けていて幸せであるように、私も本当に微力かもしれないですが、できることからやっついこうと思います。

友達だから、家族だから。私の大切な人だから。



郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

58歳のひまわり

松居友

あと二年で、ミンダナオ子ども図書館は、10周年、それとともに、ぼくは60歳を迎える。日本では、年金生活に入る年齢のようだが、ぼくの仕事は始まったばかりだ。

感動的な文章を寄稿してくれた民希さんも、来年はおそらく一橋大学を卒業して、ミンダナオ子ども図書館のスタッフとして活動し始めてくれるだろうし、アメリカから来て、2年間ミンダナオのマティ市でインターネットカフェを軌道にのせつつ、生活体験を一人ですてきた息子の陽も(25歳)本



格的にMCLのディレクターとしてインターナショナルセクションの活動を始めたので、あと二年で、基礎が固まると同時に、10年の節目を超えた時点から、スタッフも含め若い世代が、打ち込んだ基礎の上に、さらに立派な建物を建て始めてくれるだろう。

高校2年で休学し、十年間今まで、ぼくを支えて、MCLを軌道にのせる牽引役をつとめてくれた、妻のエープリリン(26歳)も、念願の大学に好成績で入り、教育学の数学科で学び始める。卒業する4年後が楽しみだ。

彼女がいなかったら、MCLは軌道に乗ることはなかっただろう。娘のアイカ(藍花)とマイカ(舞花)は、7歳と5歳だから、ぼくはまだ、20年

は生きなければならぬと思うのだ
が・・・?

少なくとも、かつて十代の奨学生だった、今は20代の現地スタッフたち十五名は、五百名にのぼる奨学生たちの全ての状況をソーシャルワーカーと共に把握しているし、外部監査士が驚くほどに、経理も会計もしっかりしている。現地における政府側、反政府側との接触は当然のこと、日本政府やJICAとのODAの仕事任せられるまでに成長したし、昨年出発したMCLジャパン事務局も、情熱的献身的なボランティア精神に支えられて、経理や対法人業務の経験をつんで、2年後には軌道にのることだろう。

MCLジャパンや現地のスタッフた



ちも、民希さんも、陽も、エープリリンも、MCLにいる多くの子たちもそうだけれど、共通しているのは、若いにもかかわらず、普通ではちょっと想像も出来ないような精神的体験や、悲しみを経験してきたにもかかわらず、否それ故になおさらに、生きる力を信じて、貧しく不運な子どもたちを心から愛する情熱に満ちていることだ。

さらに今年はずれいことに、マノゴル高校と小学校の最優秀生を始めとして、あちらこちらの学校の高校や小学校の卒業式で、親がいなかったり苦勞して育ってきたMCLの奨学生が、優秀な成績で表彰された。

(左の写真は、小学校の卒業成績トップで表彰され、英語でスピーチするグライテルさん。)

これからぼくに与えられた仕事は、高齢者たちと結託して、こうした次の時代を作り出す世代に、仕事を任せたくことだろう。



ミンダナオ子ども図書館流 平和構築の試み(1)

ミンダナオでは、三つどもえの戦闘が現在まで続いているといえる。

一つは、クリスチャン系の反政府組織と国軍、もう一つは、先住民民族系の反政府組織と国軍、そして第三は、イスラム系反政府組織と国軍。

前者の二つはNPA(新人民軍)と呼ばれる反政府組織だが、クリスチャン系の反政府活動はフィリピン全域を覆っているのに対し、先住民民族系の活動は貧困と土地所有をめぐる先住民民族



の自立闘争が中心になっていて、山岳地域を舞台に散発的に続いている。

最後のイスラム系反政府組織は、MILFモロ・イスラム解放戦線と国軍との戦闘であるが、これは国際的な資源紛争の性格も持ち、フィリピンだけではなく、アメリカ軍なども背後で関与している。

この三つは、お互いに切り離されて論じられることが多いのだが、現実には複雑に関連しあっていて、時には互いに連絡を取り合っていて活動しているだけでなく、MILFのメンバーがNPAに属していることも多い。

ミンダナオ子ども図書館は、本拠地を中部のアポ山の麓、キダパワンに置いているが、この三つの戦闘と深く関係した地域で活動している。

先日、4月19日にイスラム地域のコタバト市で、IMT国際停戦監視団の落合直之氏の提案で、フィリピン国軍側とMILF側の上層部と話をした。

これは、ピキットの戦闘地域、ブアラン村からの要望により、ミンダナオ子ども図書館が日本政府に提案し、3月に受理された、小学校建設を開始するに当たってのセキュリティを検討確認するためだ。

この席上では、率直で興味深い話し合いがなされたが、ミンダナオ情勢に詳しい国軍の指揮官からは、繰り返し、「MILF側とは問題ないが、平和交渉でより難しいのはNPAだ」という意見が述べられた。

司令官の口から具体的な地名がポンポンと出て来たが、そのことごとくが、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの子たちが多く来ているMCLの活動地域で、あえてMCLの活動を事前に調べられて語られたのかと思ったほどだ。



NPAと言っても、アラカンで30年近く働いているイタリア人のファウスト神父が言うように、作られた貧困に疑問を抱いたり、プランテーションの拡張によって土地を追われたりし



た普通の人たちでもあり、MCLの奨学生の叔父さんや時にはお父さんだったりもする。

こちらでは、「山に入る」または、「山にこもる」という言葉は、反政府組織になると言う意味だ。

近年NPAの動きは活発で、最近では若者たちへのリクルートにも積極的。時には現地で、MCLの奨学生にも接触してくるし、私たちは武器を持って問題が解決するとは思えないし、大学で軍人になるための学科である、クリミノロジーには奨学金を与えていないが、国軍に親兄弟を殺された子など、この学科への志望は多い。

最終的に、高校や大学を卒業して、

電話番号 : 080-5502-3446
FAX 専用 : 010-63-64288-5426
 メール : mclstaff@zar.att.ne.jp

さまざまな形で(例えば看護や医療で)反政府組織に関わって行く子も出ることは避けられないと思うが(反政府組織の幹部には、大学出の者たちが多い)個人の自由に関与する問題なので必要以上には関与しないし、出来もしない。

反政府組織が多い地域というと、何やら恐ろしい地域を想像する人もいるかもしれないが、実は逆に、大土地所有や農薬付けのプランテーションに毒されていない、昔の日本の田舎を思わせるような、貧しくとも素朴な人々の生活が残っている地域だったりする。日本から来られた訪問者をこうした



人々と関わることになる。

JICAなどの事務所を訪れ、壁に掛けられた地図を見ると、おおかた私たちが活動している地域は真っ赤に塗られていたりして、「松居さん、外国人で、良くこのような場所で活動しておられますねえ」と言われることも多いのだが、マスコミや机上で得られる情報と、現地の実情の格差は大きく、貧しくて学校に行けない子たちにスカラシップを提供したり、医療や読み語りをしているの、土地の人たちは私の事を良く知っているし、とりわけその地出身の若者や子どもたちと、わいわいとはしゃぎながら車に向かって、少しも恐ろしいと思わない。

国軍や外国軍の警護を付けて、窓を黒いセロフィンで覆って中が見えないようにしたVIPの車で行けば、返って怖い!

しかし、このような土地も、初めからフレンドリーで明るかったわけではない。

最初は、貧困から抜け出せない、落ち込んだ暗い地域で、ミンダナオ子ども図書館が関わりを持つことによつて、村人たちの表情や心が解放され、希望が生まれ、平和への希求が始まる。現地の人々は、誰だって、戦闘より



は、平和を望んでいることは確かだからだ。このようなところで、なぜ戦闘が起こるのか、正確に言えば、起こされるのか、その理由は、大概が、地域外に住んでいる大金持ちによる土地所有だったり、石油や希少金属の資源獲得の利権だったり、さらにその後ろに、政治家や海外資本が絡んでいたりする。例えば、ドールのプランテーションのパナナを見れば、保護に日本の新聞が使われている。

先進国主導のグローバリゼーションの力で、このような「落ちこぼれた」地域を「開発」し、雇用を創出することが貧困からの脱却だと信じている人々も先進諸国には多いのだが、現地の実情は、そう簡単ではない。開発によつて一部の人々は潤っても、多くの人々が土地から追われ、より不便な山岳地域に追いやられ、格差ばかりが大きくなり、それがさらに反政府運動に拍車をかけることもある。

現地で見えていて大事なことは、基本

土地にお連れすると、ここはまるで天国のようなところですね、とおっしゃったりするし、私もしばしば思うことがある。金力や権力に毒されていない、互いに分かち合い助け合う心が生きている素朴な人々の集団だったりするので、貧しくとも逆にホッとすることがあり、そこで遊んでいる子どもを見ると、返ってこちらの心が救われることがある。

MCLは、意識的に反政府組織と関わろうとしているわけでは毛頭無いが、より貧困な地域での活動を求めていくと、必然的に、そのような地域や

郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

的には海外資本に頼ることなく地域経済を主体にして、現地の人々が自分たちの力で食べていけ、子どもたちを学校に行かせ、医療が保障される世界だろう。さらに加えるとするならば、地域の先住民族やイスラム文化の伝統を破壊することなく、アイデンティティを保持しながら、昔話を含めて、しっかり保存し復活していくこと。これこそ、ミンダナオ子ども図書館が、現地でやろうとしていることなのだ。

イスラム地域も、基本的な内実は同じで、1970年のMNLFF結成から、1981年のMILFF分離をへて、実に40年にわたって、度重なる戦闘に苦しんできた。



私が初めて、イスラム地域ピキットとイスラム自治区で、地平線まで続く大量の避難民キャンプを見たのが、2001年の初めの事だ。

当時、キダパワンのカトリック司教館に泊めていただき、バリエス司教に車で連れて行っていただいたのだが、司教は、興奮した様子でイスラム地域の悲惨な現状を話していらした。私は、1999年からミンダナオに時々滞在していたにもかかわらず、戦闘の事など全く知らなかったのだからひどいものだが、ここまで関わるとは思っていなかった。

と言っても、80万と言われる避難民が出て、累計で12万人の死者、国連の調査では、世界で最も累計避難民数が多いといわれているミンダナオの実情を、当時日本で知っているものはほとんどなく、日本の新聞でも小さな記事が出ただけ。テレビや新聞の報道を見ただけで、世界の実情を把握していると思ひ込んでいる、先進国の人々の無知無能をここにきて実感した。

ミンダナオ全体で80万を超えると言われた避難民は、バリカタンと呼ばれる、2000年のアメリカ軍とフィリピン軍の合同演習。つまるところ演習という名の実戦で、空爆まで起こされた結果であり（死体を埋める暇無

く、川に流した）その後避難民たちがようやく自分の家に帰ろうとした時期の2003年に、今度はテロリスト掃討作戦という名の戦闘が起こった。

私がミンダナオ子ども図書館を始めたきっかけは、この地平線まで続くと思われる避難民たちを見て、いたたまれなくなったからだ。

とりわけ、子どもたちが、笑顔どころか表情すらも失っている。ミンダナオの子たちは、表情豊かで笑顔が絶えないにもかかわらず、こちらが手を振っても答えないし笑わない。

いったいこれは、どうしたことかと、ひどくショックを受けた。その時脳裏に浮かんだのが、この子たちに読み語りをしてあげたい、そうすれば少しは心の傷やトラウマも癒えるのではないだろうか、と言う事だった。

その後も、何度となく、避難民キャンプに通い、読み語りに加えて必要と



されている、医療とスカラシップを加えていき、さらに地元からの要請で、保育所建設と学校建設、そして下宿小屋の建設を行うようになった。

こうした私の現地での体験から言えることは、平和構築の最大の武器は、短期的には、閉ざされた心を開く文化と医療プロジェクト。そして長期的には、地域の人々と関わりを持つための大学までのスカラシップ。

地域を発展させ平和を構築していくのは、結果的にお金ではなく人間だから。平和活動する若者を地域から選び独自に育てるスカラシップは、人材育成の意味もこめて、地域の平和構築に驚くほどの貢献をしている。



日々の活動を、豊富な写真で、月に2回から3回の割合で更新報告しているMCLのサイト **ウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です！**

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付**
専用の振り込み用紙を日本事務局にご請求いただくか、直接下記の振替口座をお願いいたします。寄付をいただいた方々には、年四回季刊誌「ミンダナオの風」をお送りしています。
- 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回の季刊誌と手紙、7月プロフィール、3月スナップ写真、5月成績表などが届きます。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里親支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**
振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回季刊誌と3月に絵手紙、7月プロフィール、3月スナップ写真が届きます。文通やプレゼントも可能ですが、返事は半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 4、保育所建設支援・・・30万円（一括振込みでお願いします）**
振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回季刊誌と10月には毎年現地の保育所のスナップ写真。開所式参加や訪問も可能です。
- 5、古着等の物資支援：郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。**
詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

郵便振替口座番号 00100 0 18057
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

スカラシップ・里親に関する質問、スカラシップ支援の希望・継続・停止など
または現地訪問その他に関する問合せは、
電話・FAXかメールでご連絡いただければ幸いです。
折り返し、こちらからご返事をさせていただきます。

電話番号：080-5502-3446
FAX 専用：010-63-64288-5426
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp

MCLジャパン（日本事務局）：〒803-0816 福岡県北九州市小倉北区金田2-8-30-1201
Tel・Fax 093-581-1150

現地住所：Mindanao Children's Library : Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato 9400 Philippines